



# 歳時記のある暮らし

二〇二二年

《三月》

催花雨が草木の成長を促し霞たなびく山裾から春の気配が増してきました。皆様、おすこやかに過ごしてしよつか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。ごさいます。

三月の別名は弥生(やよい)。「本草弥生い茂る月(きんぎやおいげるつき)の「いやおいからきた名前」で、草木が益々盛んに生い茂る月という意味です。空に光が増し春の訪れを感じます。

三日はひな祭り。ひな人形は「上巳の節句」に人形(ひとがた)で身体をなでて穢れを移し川に流した風習に由来します。その人形と、貴族階級の女兒が行っていたままごとの「ひいな遊び」が合わさって、人形は「流しひな」と呼ばれるようになりました。江戸時代になると流しひなは豪華になり川に流さず飾るものとなりました。厄災を身代りになって引き受けてくれるひな人形に、天皇家のような幸せな生活への願いが託され、ひな人形は高額な嫁入り道具となりました。一方、立派なひな人形は買えなくても、我が子の幸せを願って作り始められたのが「つるしひな」です。赤ちゃんが生まれると親や親戚が小さな人形を作り、糸を通してつるして飾りました。今でも、山形県の「傘福」、静岡県県の「ひなのつるし飾り」、福岡県の「やげもん」は、つるしひなの「日本三大つるし飾り」として有名です。

佳二つ 桃一枝や 床の上

正岡子規

豪華なひな人形がなくとも、瓶に桃の花一枝を差し、ひなあられを供えればひな祭りの気分が盛りあがります。まだまだ寒いですが、桃の節句で華やかに春をスタートさせましょう。

五日は啓蟄。土の中も温度が上がってきて冬籠もりをしていた虫たちが這い出てくる時期です。

春の海 終日(ひねもす)のたり のたりかな

与謝蕪村

作者の故郷、丹後半島の日本海にも春が来て、極寒の冬の海とはちがい、うららかな陽が差し込み波面がきらきらと光り輝いて、ゆったりと優しく波打っている。そんな長閑さを感じます。

「お水取りが終わらないと暖かくなかない」とか「暑さ寒さも彼岸まで」とかいわれます。

「お水取り」は、奈良時代から続く奈良県の東大寺二月堂の「修二会(しゅにえ)」という行事です。

三月一日から十四日まで本行が行われ、終わるころには冬が明けていることから春を告げる行事といわれます。

(裏へ続きます)

春彼岸は、春分の日の三月二十一日を中日として前後三日間。彼岸の成り立ちは、浄土信仰に加え太陽の動きや天文学も合わさっています。古代中国では太陽が沈む真西の方角に極楽浄土があると信じられていました。太陽が真東から昇り真西へと沈む春分の日と秋分の日はこの世(此岸)とあの世(彼岸)がもとも通じやすい日と考えられ先祖をしのび墓参りをするようになりました。「春分の日」「自然をたたえ、生物をいつくしむ日」。草が萌え、木々が芽吹き、花が咲き、鳥や虫たちも活動し始めるころ、生命の息吹を感じながら先祖に感謝し、生きていることの意味を考えたいものです。

茶菜の花が しあはせさうに 黄色して

細見綾子

春雨たなびく河原や空き地に群生する茶菜の花があたりを明るく照らします。草木らかな茶菜の花の黄色は、平和や穏やかさの象徴。若くして闘病生活を続けていた作者の「あの茶菜の花のように幸せな人生を送りたかった」という切ない気持ち伝わってきます。

茶菜の花は茶の湯の始祖、千利休も好みました。禅の思想を取り込んで茶の湯を「これ以上何も削れない」という極限まで無駄を省き「侘び茶」を大成させた利休ですが、一五九一年、旧暦二月(新暦では三月)突如、秀吉より切腹を命じられます。利休の流水をくむ門弟たちは、利休の命日を「茶菜の花忌」として茶菜の花を供え、一同で薄茶をいただき利休の遺徳をしのびます。

司馬遼太郎の命日も「茶菜の花忌」と呼ばれます。司馬遼太郎は野に咲く黄色いタンポポや、とりわけ茶菜の花が大好きだったといわれます。

ひな祭りに桃の花と一緒に茶菜の花を飾りますが、それは茶菜の花から絞る茶種油を神仏に供え、お灯明として、七くなった幼い子をしのいだためともいわれます。茶菜の花の、陽光をま如てるような明るさで死という深い悲しみを緩める意図があったのでしょうか。

沈丁花が香るころ門出の季節を迎えます。冬の間、日本で過ごした雁たちは新しい生命を育むためにシベリアへと春の渡りの準備を始めます。学生たちは進級と卒業、社会人は年度替わり。将来への夢々と新しい環境への取組張が交差するころです。

×希望の春はすぐそこですが寒の戻りもごさいます。う。寒暖差にお気をつけください。  
皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当 久郷 直子

